

東アジアにおける国家有機体説
明治期日本の国家観と北朝鮮の「社会政治的生命体」論との比較
姜 海日 (JIANG Hairi) *

有機体国家論は、国家や社会を有機体としてみなす国家観である。それは西洋に於いて古代ギリシアから論じられた一種の思惟方式である。「君主を頭とし、諸身分を内臓や四肢など人体の諸部分になぞえるメタファーである。それによって、諸身分の有機的結合と共同体の単一性が喚起されるのである」¹

国家そのものを生き物として理解し、その内部に含まれている諸部分がほぼ機械的に生物の各部分の機能に当てはめて理解するのは、西洋において伝統的な専制君主による支配が瓦解するようになった 18 世紀末から変化するようになった。「ヘーゲルの言う国家有機体説とは、君主を国家に対して外在的かつ超越的なものではなく、国家の一機関として国家に対して外在的かつ超越的なものではなく、国家の一機関として国家内部に取り込み、国民とともに一体の有機体を形成しつつ、「神の意志」という単一の精神に拘束されるものとして位置づける国家論である」²

言い換えれば、国家自体は専制君主を頭脳としての生物のような実体として見為されるものではなく、国家は単一の国家精神を中核とし、君主と国民はその地位の差こそあれ、国家精神の実現に寄与する機能的な存在としていちづけられたのである。君主の国民に対する絶対手的な權威性は剥奪されたことになり、それは近代的国家の民主政治の確立に寄与したとも考えられる。

アジアに於いて一番早く近代化に成功した日本にもかかる国家説が輸入されており、ドイツにおける有機体国家は加藤弘之が 1875 年ブルンチュリの著作を『国家汎論』として翻訳出版されたのである。ただし、この舶来の国家観が当時の日本に於いて必ずしも正確に理解されたとはいえなかったのである。

近代的な中央集権的国家が建てられてまだ日の浅い明治日本に於いて、この「君主と国民とを超越する単一の国家精神」を頂点とする有機体国家論は、天皇が主権を有し、一つの国家が生物として、その最高頭脳である天皇の支配によって動かされる理論として受け止められたのである。

このように受け止められた有機体国家論は十九世紀のドイツの有機体国家論を正確に理解したとはいえず、むしろ十二世紀の有機体国家論に似ていた。すなわち、ブルンチュリおよびその後のシュタインによって論じられた有機体国家論考えた場合、天皇の絶対的權威は保障されるはずがなく、一つの機関にすぎない存在であることを認められざるを得なかったのである。いいかえれば、天皇がたとえ有機体国家における頭脳だという位置づけであっても、国家精神は単にその場所を借りて宿っていることにすぎず、「単一の国家精神はこの「頭脳」によって生み出されたものではなかった。したがって、国家の絶対的権力は天皇の所有物になれないのである。1912 年の美濃部達吉は『憲法講話』で天皇機

* 京都大学大学院、博士後期課程。

¹ 嘉戸一将「身体としての国家—明治憲法体制と国家有機体説」 p9

² 前掲論文、p10.

関説を提出すると、これに対抗して、上杉慎吉は天皇族父説を唱えたのである。

天皇族父説は万世一系の天皇が肇国の天照大神の直系子孫として国を支配する権力を掌ることになる。日本のすべての国民は、その存在の根源を遡れば天照大神にたどりつくことになるが、皇室は宗家であり、他の国民は分家になる。日本は天皇を族父とする家族国家であり、国民は天皇に対して、忠孝をもって奉るのが当然なる倫理としてきてされたのである。これは儒学思想では何ら抵抗感なく受け止められる家族倫理であり、中国に於いても、家族内部で父への孝は国家に於ける皇帝への忠と直結されたものとして理解されたのである。

ただし、十九世紀ドイツの国家有機体説が実際に、シュタインの講義まで聞いたことのある伊藤博文や天海江田信義などが単に「人格」としての国家を「人体」としての国家として理解を間違えたということはあるが、それが「有機体説が国家の統一性を支える単一の精神を宿すものとして要請されたとするならば、その精神を領導する「頭」や「頭脳」として天皇が明治憲法体制によって創出されたということ」も否めないであろう。³

さて、北朝鮮における「社会政治的生命体」という有機体的国家論はその理論的完成がかなり遅かったのである。今日、主体思想をイデオロギーとして掲げている北朝鮮は、1948年に建国された。建国初期、金日成は指導者であったものの、一人支配体制が確固たるものになったのは1956年の時からであった。1980年から金日成の息子である金正日とその権力を継承が公式化されるようになり、その世襲的支配体制は今日にまで続いている。

金日成は朝鮮半島が日本の植民から解放される1945年前から、中国の東北地方で抗日パルチザン活動を行っていた経歴を持ち、これは彼の権力正当性にとって最も重要なことであった。彼が作り出した主体思想はマルクス・レーニン主義と民族主義を結合したものであった。金日成は北朝鮮におけるイデオロギー解釈権を独占し、支配の正当化と安定化を進めた。

鐸木昌之は、北朝鮮の独特な社会主義体制を「首領制」として定義し、それを支えるイデオロギーの二本柱を革命的首領観と「社会政治的生命体」論とみなしている。⁴革命的首領観は要約すれば、「首領は革命の指導思想を創始し、民衆を一つに結束させて革命闘争と建設事業に奮起させ、正しい戦略戦術を提示し、自然と社会の改造をめざす民衆の闘争を勝利に導き、首領は民衆の団結の中心、指導の中心である。また、首領は人民大衆の要求と利益の代表者、崇高な道徳・信義の体现者である。革命家にとって首領に忠実であることは、共産主義道徳の最高表現であるといわれている」⁵

もう一つの社会政治的生命体論であり、要約すれば、人民大衆は、党の指導のもと領袖を中心に組織思想的に結束することにより、永生する自主的な生命力をもつ一つの社会

³ 嘉戸一将「身体としての国家—明治憲法体制と国家有機体説」p15

⁴ 鐸木昌之「北朝鮮の政治体制と冷戦—首領制国家における忠誠の形成と溶解を中心に」p26

⁵ 金正日「活動家の中で、主体的革命観をしっかりと立てることについて」

http://www.ournation-school.com/contents/library/lb03/library_lb03_2271/97.htm
2016年1月9日、原文は朝鮮語であり、引用した部分は筆者が日本語に翻訳した。

的政治的生命体を形成するようになること、個別的人間の肉体的生命にはかぎりがありますが、自主的な社会的政治的生命体に結束した人民大衆の生命は永遠であること、首領は脳髄、党は血管あるいは神経、人民大衆は細胞の役割をそれぞれなし、永遠に生き続けることができるという論理であった。首領は、人民大衆に政治的生命を与えた親であるので、人民大衆は滅私して首領に孝行を尽くさなければならなかった。⁶

革命的首領観からもわかるように、首領は一般民衆に比べる限り、ほぼ全知全能なる存在であり、その権力は絶大なるものである。革命活動というのはいいかえれば首領の考えを民衆たちが首領の指示に従って行われる過程である。人民大衆は革命の勝利のために首領への限りない忠誠を尽くのがかかる形で理論づけられたのである。

社会政治的生命体論が正式に提出される前から、北朝鮮においては、首領の人民への愛を「父なる愛」と表現していたが、それは抗日パルチザンの時に指導者としての金日成とそのパルチザンの成員たちの関係を全国民に拡大することになる。

首領を父として表現することの目的が儒教的な倫理である「孝」を政治的支配に利用することは言うまでもない。血縁的な関係のない一般民衆たちとの間で、「孝」意識が正当化されるために、疑似的な血縁関係を作り出し、しかも首領様から与えられた「社会政治的生命」は肉体的生命より次元の高いものとして定義されたのである。すわなち、親への「孝」よりも首領への「孝」が優先されるべきである。首領は民衆との間で親子たる関係を形成し、北朝鮮全体は、首領を家長とする革命的大家族になったのである。

首領は「忠誠」と「孝誠」によって国家の最高支配者として国民に君臨することになるが、その理論には一つの矛盾を孕んでいる、すなわち、「社会政治的生命体」において、首領は生命をその構成員である人民大衆に与えた「母体」であるとともに、生命体内部における位置づけは脳髄になっている。これは権力の正当性と権威の正当性が「首領」に集中される時に起こる不整合性である。

金日成が国家の最高権力を握る正当性は抗日パルチザン武装活動である。しかし、伝統的な儒教的国家である朝鮮半島は李氏王朝から植民地に転落し、解放とともにソ連の支持で共産主義国家になった北朝鮮に於いて、指導者になった金日成はそれまでの活動がほぼすべて朝鮮半島の外部で行われたいわば外部者であった。社会政治的生命体論の後から集中的に行われた革命伝統のねつ造はいいかえれば、権力だけを持っている首領が「民族の父」としての権威を樹立する過程ともいえるだろう。

それにくらべて、明治期の天皇は権威が徹底的に保証されたとはいえ、中央主権的な権力の獲得が最も重要な課題であった。明治期にドイツの「有機体国家論」を「人格」ではなく「人間」としてみなし、天皇を脳髄と位置付けたのは、その権力が当為性を持つための必然的な過程であり、それが確定されることによって、権威と権力は天皇に集中されたのである。首領が社会政治的生命体論で「権力」に「権威」を補完したならば、天皇は、ドイツからの「国家有機体論」を復古的に受け止めることで、「権威」に「権力」を補完したのではないかとも思われる。

⁶ 金正日「主体思想教養で提起されるいくつかの問題について」http://www.ournation-school.com/contents/library/lb03/library_lb03_2230/2009-07-30.htm 2016年1月9日 原文は朝鮮語であり、引用した部分は筆者が日本語に翻訳した。

参考文献

文部省編纂『国体の本義』1937 年

古田博司「北朝鮮における儒教の伝統と主体思想の展開—金正日「七・一五談話」を中心に」『下関市立大学論集』第 34 巻 3 号、1991、pp. 29—70、

鐸木昌之「北朝鮮の政治体制と冷戦—首領制国家における忠誠の形成と溶解を中心に」『新防衛論集』第 25 巻 1 号、1997、pp. 24—40

古田博司「天皇と首領—東アジアにおける有機体国家論の隠された底流」『大航海』45、2003、pp. 143—149、

嘉戸一将「身体としての国家—明治憲法体制と国家有機体説」『相愛大学人文科学研究所研究年報』4、2010、pp. 9—20、

金正日「活動家の中で、主体的革命観をしっかりと立てることについて」

http://www.ournation-school.com/contents/library/lb03/library_lb03_2271/97.htm 2016 年 1 月 9 日にアクセス

金正日「主体思想教養で提起されるいくつかの問題について」〈http://www.ournation-school.com/contents/library/lb03/library_lb03_2230/2009-07-30htm〉 2016 年 1 月 9 日にアクセス